

自閉症スペクトラム障害の特性に応じた地域支援への今後の課題

「下関市イルカふれあい体験」から学んだこと

木谷 秀勝・小田 智佳^{*1}・原田 一孝^{*2}・山口真理子^{*3}

Challenges of Regional Support Fit for the Characteristics of Autism Spectrum Disorder
Through experiences from “Dolphin Assisted Therapy in Shimonoseki”

KIYA Hidekatsu, ODA Chika^{*1}, HARADA Kazutaka^{*2}, YAMAGUCHI Mariko^{*3}

(Received January 6, 2016)

キーワード：イルカ介在療法、自閉症スペクトラム障害、地域支援

はじめに

今回の報告は平成27年9月19日（土）に下関市立市民病院で開催された「下関市イルカふれあい体験」シンポジウムをまとめたものである。開始から13年目を迎えた「下関市イルカふれあい体験」（以下、「イルカ体験」）を振り返る作業を通して、これまでとこれからの自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder：以下、ASD）への地域支援の方向性について検討することが重要な課題である。

1. 「下関市イルカふれあい体験」の概要

本章はシンポジウムにおいて「これまでの歴史」と「体験の意義」を報告した下関市障害者スポーツセンター小田智佳氏の発表スライドを参考に報告する。

1-1 「イルカ体験」の歴史

「イルカ体験」は平成15年5月の「海響館イルカセラピー」講演会の開催を期に、その年の7月から対象を下関市在住のASDとしてプログラムを開始した。当初は、木谷研究室が中心に、障害者スポーツ指導員や障害幼児通園施設指導員、教員、臨床心理士など下関市で活躍する療育スタッフ（役割は後述）と海響館のイルカスタッフ（役割は後述）、そして下関市立中央病院（現下関市立市民病院）小児科の協力を得て、事務的な対応は同病院の事務が担当した。

2年目の平成16年度からは、新規参加ASDは1月に4回のプログラムとして、前年度経験ASDは期間中に1回参加できるように工夫した。3年目の平成17年度から、正式名称を下関市「イルカふれあい体験」に変更した。その後、平成21年度はイルカの出産のために規模を縮小して実施したが、平成22年度からは従来通りに戻すと同時に、ほぼ現在のプログラム内容に固定して、現在に至っている。

1-2 「イルカ体験」のプログラム

基本的にはASDが月に4回の「イルカ体験」を行うプログラムである。そのプログラムの内容は、当初から図1に示した基本的流れを現在も継続している。

開始前のオリエンテーション時には、参加ASDの体調の確認（市民病院小児科医師と看護師）から始まり、参加ASDの担当スタッフを決めて、実際のプログラム映像を視聴した後で、図1に示した内容を簡潔に説明するオリエンテーションを行う。その後、会議室からイルカプールに向い、プログラムを開始する。そこからは、参加ASDに1対1で療育スタッフが担当するが、基本的なイルカへの関わり方については海響館のイ

*1 下関市障害者スポーツセンター *2 「海響館」展示部海獣展示課 *3 下関市こども発達センター

ルカスタッフが声かけをしながら進めるようにしている。プログラムの内容は図2～5（以下に図で示す写真は、学術用に撮影した写真であり、本プログラムの対象児童とは無関係である）に示したように、参加ASD一人ひとりのペースや個性（イルカへのタッチングも一人ひとり違っている）に合わせて、できるだけ柔軟に対応するように心がけているが、実際には参加ASD以上にイルカの状態に左右される場合もある。

ASDの特性として、初めての環境や体験への苦手さが強いことは事実である。そこで、参加ASDの緊張感を軽減する目的から、各プログラムでは前年度までの体験者が最初に見本を見せてもらうよう順番を調整している。その成果もあり、新規参加ASDから見ると、モデルとなったASDのように「チャレンジしてみたい」気持ちそのものが、「イルカ体験」への動機づけを高める要因になっている。

また、プログラム内容もステップバイステップで難しさのレベルを上げていくが、基本的には上手にできた場合には、担当スタッフ、海響館イルカスタッフ、そして近くで見ている家族が即時強化としてほめることを大切にしている。実際、プログラム終了後に会議室に集まった段階では、参加ASDのホッとしながらも達成感に満ちた表情を見ながら、家族も安堵した表情になっている場面をしばしば見ている。

○開始前のオリエンテーション：海響館内の会議室で、参加者の自己紹介、スタッフ紹介、イルカについての事前学習などを全員（家族も含めて）で行う

○「イルカ体験」プログラム

プールサイドの亚克力板越しにあいさつ：イルカに対する緊張感を和らげる（図2）

↓

亚克力板の上からタッチング：イルカの全身を直接観察する

↓

プールの浅瀬でのタッチング：海水の冷たさを感じながらイルカと関わる（図3）

↓

トレーナー体験：えさやり、海水のかけ合いなど（図4）

↓

浅瀬から深いプールの縁に座ってのタッチング：深みへの怖さを軽減していく

↓

深いプールの中でイルカのジャンプと泳ぎを見る：目の前での臨場感を体験する

↓

深いプールの中でイルカと一緒に泳ぐ：達成感を体験する（図5）

○プログラム後の集まり：その日のまとめの話、その後、スタッフでの反省会

図1：イルカ体験の基本的流れ

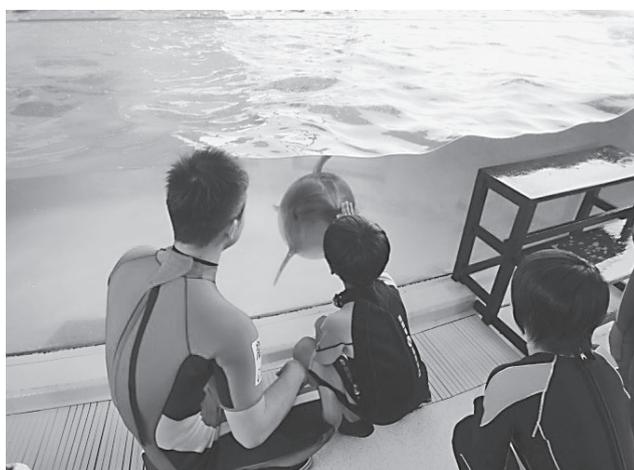


図2：イルカにあいさつ



図3：タッチング



図4：トレーナー体験



図5：イルカと泳ぐ

1-3 「イルカ体験」の意義

「イルカ体験」は、好奇心旺盛なイルカだから可能な独自の体験のように考えられているが、実際には目に見えない13年間にわたって積み上げられてきた経験値があるからこそ可能なプログラムである。

たとえば、海響館にとって、普段はイルカショーのためにトレーニングしているイルカたちに、タッチングの間、じっとしているようにトレーニングすることはかなりの努力と時間を要することは事実である（詳細は後述）。また、下関市に住んでいる子どもたちにとって海響館やイルカショーはとても楽しい場所であるが、このプログラムに参加する場合には、いつもの違う場所に集まり、初めてのウェットスーツ（締め付け感が強く、暑さも感じる）を着て、そして何よりも、目の前で見えるイルカの大きさに戸惑うばかりである。しかも、先にふれたように、ASDという特性があると、こうした不安や怖さがさらに募ることも確かである。そこで、「イルカ体験」に慣れた療育スタッフ（それでも難しい場合には、木谷が対応する）が、1人ひとりの特性に応じながらプログラムを進めている。

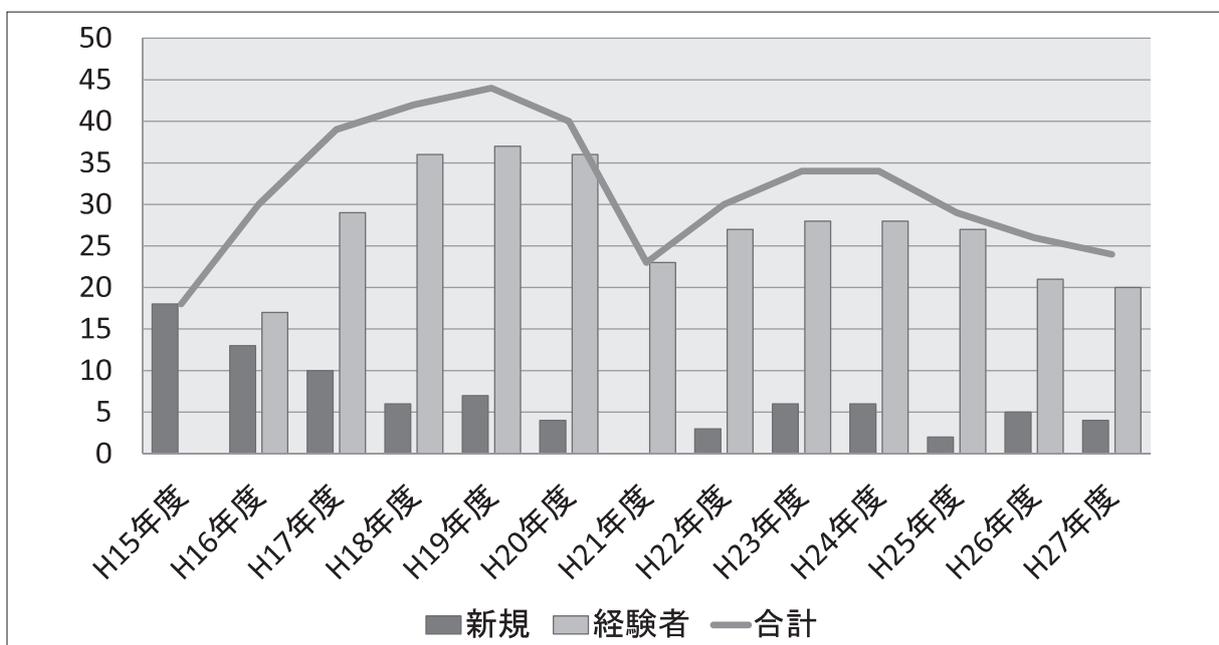


図6：参加者の推移

こうしたさまざまな配慮を丁寧に行う背景にある「イルカ体験」の一貫した姿勢として、「このプログラムの主役は参加するASDであり、ASDも一人の好奇心旺盛な子どもである」という考え方を基本に置いている（木谷，2011）。したがって、大切なことは参加したASDが「自分から新たなプログラムにチャレンジしたい」気持ちを重視しながら、スタッフはその環境を整備することである。

実際に、1回でもプログラムを体験すると、次のプログラムへの見通しが立つようになり、ウェットスーツにも慣れて、「次まで待つ」ことが（苦痛ではなく）楽しみに変わっていく様子を見ることが出来る。

このように、参加したASDのプログラムに対する高い動機づけを計る資料として、「イルカ体験」の参加ASDの推移を図6に示す。折れ線グラフからわかるように、平成21年度に大きく減少しているが、その理由は先に示したプログラムの縮小による。また、平成25年度以降に減少傾向にある理由は、「イルカ体験」への参加は中学3年生で卒業するために、長年の経験者が卒業したためである。これらの理由を考慮に入れても、この「イルカ体験」の参加者が高い動機づけを維持しながら継続してプログラムに参加している実態が理解できる。

2. 海響館からみた「イルカ体験」の意義

本章は、シンポジウムにおいて「海響館から見た体験の意義」を報告したしものせき水族館「海響館」展示部海獣展示課原田一孝氏の発表スライドを参考に報告する。

2-1 「海響館」がもつ役割とは

「海響館」は正式には「下関市立しものせき水族館」の愛称である。その水族館の役割は、種の保存・調査、研究・教育・レクリエーションであるが、今回の「イルカ体験」の場合、市立水族館の新たな役割として地域活性化に寄与するための地域貢献の担い手としての役割がある（図7）。

実際に、全国の水族館の中で、この「イルカ体験」と同様なプログラムを長年にわたり継続している水族館はない。その背景には、それぞれの水族館が担う特殊性によるが、それ以上に、先に示したように、イルカがいるかどうか、またそのイルカをショー用ではなく、セラピー用にトレーニング（コントロール）することが可能かどうかなどさまざまな問題が潜んでいることも事実です。その点からも、今回の「イルカ体験」に対する海響館が果たす役割は多大であることがわかる。

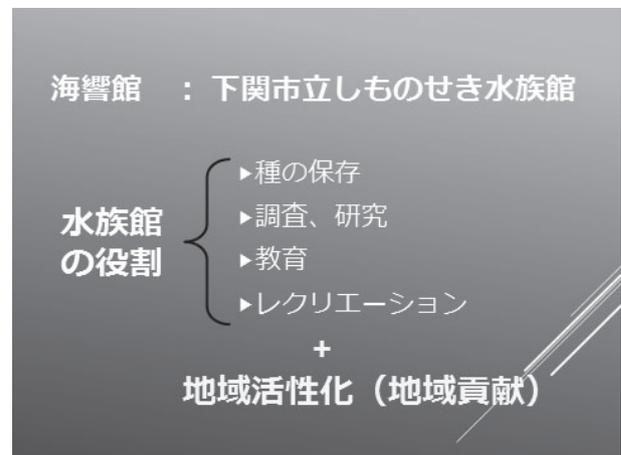


図7：水族館の役割

2-2 「イルカ体験」の役割と意義

具体的には、「イルカ体験」における海響館の役割は大きく3点である。第1に、プログラム開発である。イルカの専門的立場からより効果的なプログラムを提案することで、新規参加でも、継続して参加しているASDでも新しい体験にチャレンジ（同時に安全性も配慮しながら）できるよう見直しを続けている（図8）。

第2に、イルカのコントロールである。先に述べたように、イルカをショー用にトレーニングする場合、イルカは「動」の状態が求められる。一方、「イルカ体験」では水しぶきを飛ばさずにASDに近づくことや尾びれを動かすことなく前進するなど、ショーと真反対の「静」の状態を維持できるようにトレーニングすることはかなり困難な作業である。さらに、イルカは個体ごとに性格が違うために、その個体に合わせた対応も工夫しなければならない。第3に、「イルカ体験」時の補助の役割である。「イルカ体験」の場合、海響館イルカスタッフ（トレーナー）はリードトレーナー（ASDのすぐ横でサポートする役割）とコーディネーター（事前説明や進行調整の役割）に分かれるが、基



図8：プログラム開発

本的にはASDとイルカの間に入り、安全にふれあいができるように「イルカとASDとの橋渡し」として「ASDが安心して体験に参加できるような関わり」を基本としている。

こうした関わり方を通して、トレーナーとしても、療育スタッフ同様に「参加者の体験前後の様子」、「イルカへの触り方の変化」、「水に入った時の変化」、「終わった時の達成感のある表情」などから、新しいことにほんの少しチャレンジする意志の大切さを感じていることは確かである。

3. 心理的側面から見た「イルカ体験」の意義

これまで述べてきた「イルカ体験」の意義からわかるように、イルカ介在療法はイルカ自体がもつ不思議な力で障害を癒すといった魔術的な技法ではない。むしろ、イルカとASD、ASDとイルカスタッフ、そしてASDと家族との間で生まれる相互コミュニケーションを通して、主役であるASD自身がちよびり成長する場だと考えるほうが適切である。筆者らの研究（小畑・木谷，2010）でも、イルカふれあい体験後の生活場面で「積極性」がより増加していること、情緒面でも生活場面で安定感に効果が見られる可能性（長期的な持続については不明）があること、しかしながら、問題行動の改善には効果は見られないことが示唆されている。

3-1 「イルカ体験」の参加ASDの事例紹介

次に、「イルカ体験」を通して、実際にどのような心理的变化が生じるかについて3事例を通して検討したい。なお、事例の紹介に際して、個人が特定されないように事実関係を一部修正している点は事前に了解願いたい。また、事例紹介のそれぞれの図9～11については、シンポジウムで報告した山口真理子氏が作成したスライド資料を活用している。

事例1（図9）

事例1：初めての体験でイルカとふれあいたい女の子 (総合支援学校小学部2年生)

<p>第1週 開始前の緊張した表情 アクリル板越しにイルカに注目 浅瀬ではスタッフにしがみつ</p>	<p>← 見通しが立たない不安 ← イルカは好き ← 実物の怖さ</p>	
<p>第2週 事前のビデオに注目 耳ふさぎ・顔を背ける スタッフと一緒に触れる</p>	<p>← 期待感 ← イルカの声が聞きたい・反応が見たい ← 安心できる人とチャレンジ</p>	
<p>第3週 自発的にイルカに注目・触れる 「こわい」「もう1回」</p>	<p>← イルカの反応への期待 ← 葛藤しながらもチャレンジしたい</p>	
<p>第4週 ひとりで自らイルカに触れる イルカと泳いで笑顔になる</p>	<p>← 見通しと自信を持ってチャレンジ ← 達成感・満足感</p>	

イルカへの興味

図9：事例1

事例2 (図10)

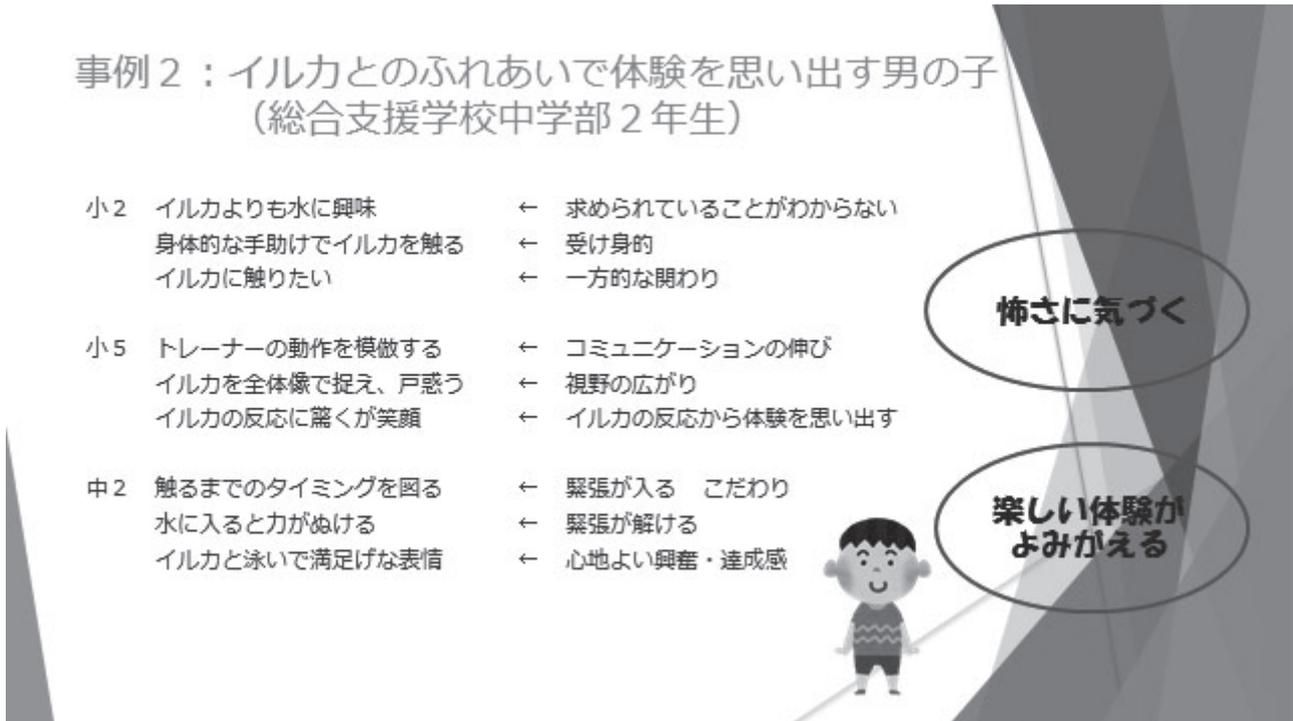


図10：事例2

事例3 (図11)

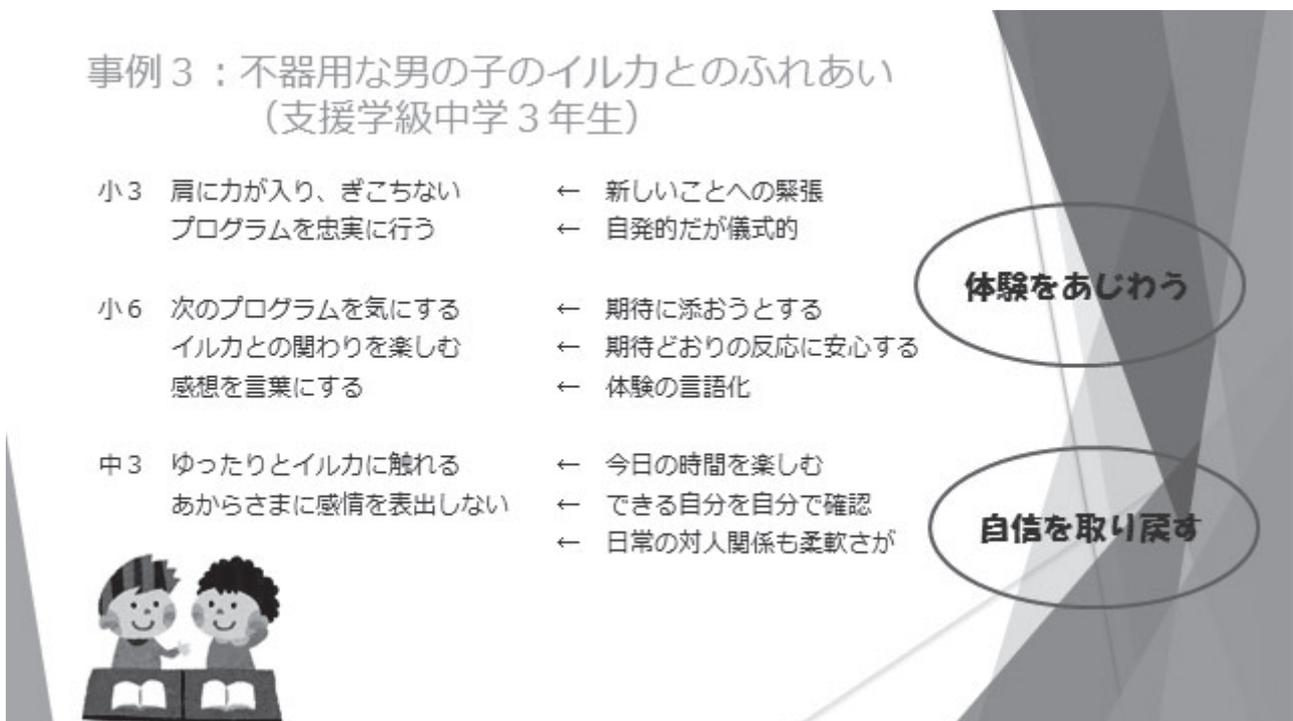


図11：事例3

3-2 「イルカ体験」の過程で生じる心理的変化

事例1の4回の体験からも、「予想できない怖さ」と「イルカへの興味」との狭間で生じる葛藤をイルカスタッフや療育スタッフとともに、乗り越えたからこそ体験できる達成感・満足感に至る過程が理解できる。また、成長過程から見てみると、最初はイルカへの好奇心だけで満足していたASDが、成長する過程（特

に思春期)で、社会的視野が広がると、かえって「イルカを全体像で捉えるようになり、その大きさと怖さからタッチングに戸惑う」場面が見られることも特徴的である(事例2)。そして、その戸惑いを乗り越える過程を通して、「自分らしく」タッチングする様子やゆったりとタッチングを味わう様子など、情緒的に成長した姿(事例3)へと変化していく。

3-3 家族にとっての「イルカ体験」

こうした心理的变化を間近で感じているのは家族である。この「イルカ体験」の基本的視点として、年に1回(新規の場合は4回)の「イルカ体験」でASDが成長した姿を見せた場合、その背景にそれまで1年間の家族の毎日の努力があったからこそ、その成果が「イルカ体験」を通して顕在化する視点を大切にしている。実際に、「イルカ体験」を近くで見守る家族の存在は、ASDにとっては「見守られる安心感」、「自分の体験を見てもらえることの誇らしさ」を感じられる存在であり、その安心した環境の元で新たな体験へと一歩進むことが確かにできている。そして、その一瞬を共有することで「家族が子どもの成長を改めて感じられる」場として、この「イルカ体験」を位置づけることができる。

4. 今後の課題

今回実施したシンポジウムからは、「イルカ体験」がもつ地域支援の可能性を改めて整理する機会を得たことは大きな成果である。ところが、その一方でこれからの「イルカ体験」の方向性を改めて検討すべき局面に来ていることも事実であり、今回のシンポジウムと合わせて開催した基調講演「ASDに関する最新の知見からわかる支援の方向性」の講師として辻井正次先生をお招きした点もこうした背景によるものである。

実際に、シンポジウムの指定討論者としても登壇してもらった辻井先生から、「イルカ体験」の今後の方向性に関して、貴重な示唆を得ることができた。そこで、辻井先生が示した論点を中心にして、「イルカ体験」の今後の課題について整理してみたい。

4-1 海響館の役割

長期的な視点から見ると、現在のようにショー用にトレーニングを受けているイルカよりも、ふれあい体験用に特化したトレーニングだけを受けているイルカの個体が活用できるように検討することが課題である。実際に、筆者も体験しているが、さぬき市のドルフィンセンターでは、長年セラピー用にトレーニングされたイルカが人気を博していることは確かである。

同時に、現在のプログラムでは、4~6名のASDを対象にしているが、限られた時間(ショーが終わってからの約1時間)でじっくりとイルカと関わることは自ずと限界がある。そのため、たとえば1対1などともっとトレーナーが積極的に関与できるプログラムを検討することも必要になってくるだろう。

4-2 下関市立市民病院(行政側)の役割

これからの方向性を検討する場合、第1に、「イルカ体験」への参加対象をどのようにするかが大きな課題になる。現在は下関市在住の中学3年生までのASDに限定しているが、年齢(年長者を含めて)・他の障害などの可能性を検討する必要がある。第2に、もっと行政(特に児童・障害福祉)を巻き込む形として、自立支援協議会や放課後デイサービスと連携しながら、成人になっても、あるいは放課後デイに参加している場合には、年に1回はタッチングだけでもできるような方法など、最終的にはセラピー的な体験から地域支援の一環として余暇支援に位置づける方向性も重要になるのではないだろうか。

4-3 支援者の養成

以上に示した方向性を具体化するためには、現在のスタッフの構成ではプログラム自体が限定的になってしまうリスクが高い。したがって、同じプログラム内容で同じように「イルカ体験」を進めることができる支援者の養成のためにも、学校関係者、放課後デイの指導員などにもっと積極的に参加を呼びかける必要がある。そして、そこに参加した支援者を通して、この「イルカ体験」の意味をさらに地域に拡大させる方向性も検討すべきである。

まとめにかえて

今回の講演会・シンポジウムを通して、広い視野から「下関イルカふれあい体験」のこれまでの歩みを整理することができた。同時に、今後の課題を通して、ASDに対する下関市全体での地域支援の方向性について示唆を得ることができた。近年のASDに関する研究成果からもわかるように、従来のように学校教育への支援に重きを置いていた時代から、新たに青年期以降の支援の重要性（木谷，2015）が指摘されている。同時に、頑張るためのソーシャルスキル以上に、余暇支援を視野に入れたリフレッシュのためのライフスキルやソフトスキルの研究も進んでいる（梅永，2014）。

こうしたASD支援への新たな方向性が指摘され始めた現在だからこそ、改めて「イルカ体験」の意義を再考しながら、さらにASDとその家族にとって、「小さいけれど、長く続けることができる」地域支援の在り方を今後も検討してみたい。

付記

今回の報告をまとめるにあたり、貴重な講演会・シンポジウムを主催して頂きました下関市立市民病院田中雅夫院長を初めとして、小児科医局及び看護師の皆様、「海響館」石橋敏章館長を初めとして、トレーナーの方々、これまで療育スタッフとしてご協力頂いた関係者各位に改めて感謝申し上げます。そして、いつも大変な事務作業を快く引き受けて頂いています下関市立市民病院の事務の皆様には心より感謝申し上げます。

また、基調講演と指定討論において、貴重なご助言を頂きました中京大学辻井正次教授に深く感謝申し上げます。最後になりますが、この体験に長い間の協力と理解を頂いております多くのASDの子どもたちとそのご家族に厚くお礼申し上げます。

文献（今回は、「イルカ体験」を紹介した文献も合わせて紹介します）

- 木谷秀勝・石村真理子・宮崎佳代子・坪崎仁美（2004）：自閉症とイルカ介在療法—地域支援の視点からの分析．山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，17，183-190.
- 木谷秀勝（2005）：高機能自閉症児とイルカ介在療法—イルカと遊ぶ中で生まれるもの．杉山登志郎編：アスペルガー症候群と高機能自閉症—青年期の社会性のために．159-165．学習研究社.
- 木谷秀勝（2005）：イルカふれあい体験（インタビュー記事）．公衆衛生，69（12），36-39.
- 木谷秀勝・宮崎佳代子・石村真理子・西川麻里子・坪崎仁美・市野瀬かの子（2005）：発達障害児へのイルカ介在療法の展望に関する一考察—J D A T と下関市海響館での活動を中心に．山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，18，127-133.
- 木谷秀勝（2007）：自閉症児とイルカふれあい体験—「触れ合おう」とする中から変わること．教育と医学，55（2），71-76．慶應大学出版会.
- 木谷秀勝（2011）：イルカ介在療法．心理臨床の広場，3（2），36-37.
- 木谷秀勝（2015）：思春期・青年期の発達障害の心理アセスメントの支援．教育と医学，63（11），30-35.
- 小畑恵美子・木谷秀勝（2009）：イルカ介在療法の可能性を探る—文献的考察を中心に．山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，28，115-124.
- 小畑恵美子・木谷秀勝（2010）：自閉症児へのイルカ介在療法の心理的効果に関する一考察．山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，30，121-128.
- 下関市立中央病院・下関市立しものせき水族館「海響館」・山口大学教育学部木谷研究室編（2007）：下関市イルカふれあい体験報告書（平成14年度～18年度）
- 辻井正次・中村和彦編著（2003）：イルカ・セラピー入門—自閉症児のためのイルカ介在療法．ブレーン出版.
- 梅永雄二編（2014）：自立を叶える！特別支援教育ライフスキルトレーニング実践ブック．明治図書.